

<研究ノート>

ソーシャルワーク実習中における学生の主観的困りごとへの  
スーパービジョン：実習生へのアンケート調査から

梅谷進康 畠中耕 黒木利作 井土睦雄 打田信彦  
吉森恵 魚住剛 熊谷智加子 石井恒生

Supervising Students' Encountering Subjective Problems in a Social Work  
Field Practicum: A Questionnaire Survey

Nobuyasu UMETANI Kou HATAKENAKA Risaku KUROIKI  
Mutsuo IDO Nobuhiko UCHIDA Megumi YOSHIMORI  
Tsuoyoshi UOZUMI Chikako KUMAGAI Hisao ISHII

This study clarified important issues related to the supervision by Kobe University of Health and Welfare (KUHWF) teachers of their students who had subjective problems in their social work field practicum.

The raw data were obtained through a questionnaire survey. The survey was completed by 100 KUHWF students who completed their social work field practicum in 2012. The data were analyzed both qualitatively and quantitatively.

On the basis of the survey results, the following suggestions were raised: (1) KUHWF teachers should supervise their students with subjective problems about forming relationships with clients (i.e., welfare service users). (2) The teachers should provide support to the students, regarding careful and gentle intervention in their subjective problems. (3) The teachers should perform educational functions for the students. These functions involve teaching the students methods of forming good relationships with the clients, intervening with the clients, forming good relationships with professional field workers, developing awareness of the clients' locations (i.e., the states they reside in), protecting the personal information of the clients, forming the client care plan, and writing the field practicum notebook. (4) Finally, the teachers should perform administrative functions for the students. These functions involve preventing harassment of students, by the clients and others, maintaining an appropriate field practicum program for the students, and protecting students' well-being.

Key words : social work field practicum, subjective problems, supervision, questionnaire survey

ソーシャルワーク実習 主観的困りごと スーパービジョン アンケート調査

1. 背景と目的

1. 1. 神戸医療福祉大学におけるソーシャルワーク実習の概要

神戸医療福祉大学（以下「神福大」という）は、兵庫県福崎町、大阪府大阪市、兵庫県神戸市にキャンパスを構える4年制大学である。神福大では、社会福祉士をはじめとし

た各種福祉専門職や中学校・高等学校の保健体育教諭などの養成を、兵庫県福崎町にある姫路キャンパスにおいて中心に行っている。

神福大の学生が社会福祉士資格を得るためには、社会福祉士国家試験の受験資格の取得後、この試験に合格することが必須条件となる。神福大の学生がこの受験資格を得るためには、福祉の実践現場で学修する科目である「ソーシャルワーク実習」の単位を必ず修得しなければならない。

ソーシャルワーク実習の実施施設・機関は、児童養護施設、障害者支援施設、特別養護老人ホーム、社会福祉協議会、地域包括支援センター、病院など多種多様である。この実習の時間数は180時間である。したがって、実習の単位修得をめざす学生は、前述の施設等で23日間以上の実習を行うこととなる。なお、神福大の学生は、この実習を3年次または4年次の8～9月を中心に集中実習として行っている。

神福大における平成24年度のソーシャルワーク実習履修者は、111人（旧カリキュラムの科目名称である「社会福祉援助技術実習」の履修者3人を含む）であった。このうち、実際に実習を行った学生は100人であった。これらの学生のうち、実習を中断した者はいなかったため、実習を終えた人数も100人であった。

神福大では平成24年度において、8人の教員がこれらの実習生に対するソーシャルワーク実習の事前・事後指導、および帰校日や実習巡回での指導を担当した。

## 1. 2. 研究の目的

ソーシャルワーク実習を行う神福大生の一部には、介護実習やボランティア、そしてアルバイトなどで福祉の実践現場に一定期間、身を置いたことがある者はいる。しかし、ほ

とんどの学生は、なじみのない施設等でソーシャルワーク実習を行うこととなる。また、学生にとってソーシャルワーク実習は初めての体験であるとともに、前述のように180時間（23日間以上）という長丁場である。

このような状況で行う実習において、学生は不安やストレス、悩みを抱える場合がある<sup>1) 2)</sup>。また、学生は程度の差はあるが、実習中に困りごとを抱える場合があると考えられる。なお、「困る」とは広辞苑によると「どうしてよいかわからず苦しむ」<sup>3)</sup>ことであり、精神的な負担を有する状態であるといえる。

このような実習中の精神的な負担は、実習を継続しがたい状況に陥らせることもあるため、適切に対処しなければならない<sup>4)</sup>。この実習における困りごとの具体例としては、「利用者との関係」「職員との関係」「個人情報への閲覧」「実習記録」「自分の体調」「通勤」「実習中の生活費」が挙げられる<sup>5)</sup>。

また、ソーシャルワーク実習ではないが、福祉関連分野である保育士養成課程における施設実習（児童養護施設などの福祉関連施設で実施）で、学生は次の困りごとを抱える場合がある。それは、「利用者との関係」「実習日誌」「実習生ができる範囲」「利用者への支援技術」「職員との関係」「自己管理」「実習生同士の関係」である<sup>6)</sup>。

学生が抱えるこのような実習中の困りごとについては、実習先の指導者からさまざまなサポートが実施されると思われる。ただし、教員も巡回指導や帰校日指導などでその相談に乗り、実習生が専門職として成長することにつながるスーパービジョンを行う必要があるといえる。

なお、ソーシャルワークにおけるスーパービジョンとは、「ソーシャルワークを行う施設や機関において、スーパーバイザーによって行われる専門職としてのソーシャルワー

カーを養成する過程」<sup>7)</sup>のことである。

このスーパービジョンの機能には、支持的機能、教育的機能、管理的機能の3つがある<sup>8)</sup>。支持的機能とは、スーパーバイザーを精神的に支えることである<sup>9) 10)</sup>。教育的機能とは、スーパーバイザーに専門職としての価値・知識・技術、および基本的態度などを教育することである<sup>11) 12)</sup>。管理的機能とは、スーパーバイザーが組織のなかで活躍できるよう、また組織の方針に沿って援助活動に専念できるよう管理していくことである<sup>13)</sup>。

以上を踏まえて、本研究では実習において学生自身が感じる困りごと、いわば学生の主観的困りごとに対するスーパービジョンに焦点をあてることにする。具体的には、ソーシャルワーク実習中に神福大生が抱く主観的困りごとを分析・考察することにより、今後この実習を行う神福大生へ神福大教員がスーパービジョンを行う際の留意点について明確化することを目的とする。

なお、神福大生が抱くソーシャルワーク実習中の主観的困りごとについては、今まで全学的に調査されたことがなかったため、この実態を全学的に把握すること自体、神福大の実習教育にとって意義があるといえる。

## 2. 方法

### 2. 1. 調査方法

本研究では、平成24年度にソーシャルワーク実習を行った神福大の学生全員（100人）を対象にアンケート調査を行った。アンケート用紙は、自記式質問紙を用いた。調査対象者への調査協力依頼文書、調査内容説明文書の配布およびアンケート用紙の配布・回収は、実習の事前・事後教育を行う授業のクラス別に担当教員が行った。

調査期間は平成24年10月1日～12月6日

で、実習を終了した学生から随時、調査を行った。なお、当初は回答期日を11月末日としていたが、12月6日に回収した回答済みのアンケート用紙が2件あったため、この日を回答の締め切りとした。

### 2. 2. 質問内容

アンケート用紙の構成は、「基本属性」「実習状況」「教員・実習先職員からの教育・指導」「実習中における困りごとの有無」に関する質問であった。回答形式は、選択回答と自由回答を併用した。

アンケート用紙は、前述の村田・久貝・高木による知見および小倉・土谷の知見を参考に、本研究の代表者（梅谷）を中心に作成した。資料1は、本調査で使用したアンケート用紙である。

### 2. 3. データ分析方法

データ分析について、調査者が設定した選択肢にもとづいた回答は、IBM SPSS Statistics 20を使用して統計処理を行った。また、自由記述による回答については、パーソナルコンピュータのワープロソフトに記述内容を入力した後、定性的コーディングを行った。本研究におけるコーディングは、帰納的なアプローチ（たたき上げ式）により行った。具体的にはオープン・コーディング、焦点的コーディングを行い、そして概念的カテゴリーを生成した<sup>14)</sup>。コーディング作業については、客観性を高めるために研究代表者を含め3人の教員で検討し行った。

## 3. 倫理的配慮

本研究では調査対象者に、主に次の3点が書かれた説明文書が無記名式のアンケート用紙とともに配布した。その3点とは、①本調

査への協力は任意であること、②得られたデータは学術的研究および教育資料以外に使用しないこと、③調査結果を公表する際には個人が特定できないようにすることである。

そして、回答済みのアンケート用紙は研究代表者が鍵のかかる場所に保管するとともに、インターネットに未接続のパーソナルコンピュータに個人が特定できないようにして入力した。また、入力したデータはパーソナルコンピュータ内に保存せず、USBメモリーに保存し鍵のかかる場所に保管した。

なお、本研究は、神福大の倫理審査委員会に承認を得た後に実施した（承認日：平成24年8月27日）。

## 4. 結果

### 4. 1. 回答数・有効回答率

本研究では、前述のように平成24年度にソーシャルワーク実習を行った神福大の学生全員（100人）を対象にアンケート調査を行った。回答数は96件で、有効回答率は96%であった。

### 4. 2. 分析結果

#### 4. 2. 1. 回答者の基本属性

回答者の性別は男性が41人、女性が55人

であった。回答者の学年は3年生が62人、4年生が33人、その他（卒業生（科目等履修生））が1人であった。回答者の所属学科・コースおよび実習先種別は表1のとおりであった。

所属学科・コース別の回答数は生活医療福祉学科生活医療福祉コースが9人、同学科介護福祉コースが25人、同学科児童福祉コースが16人、福祉健康スポーツ学科が24人、経営福祉ビジネス学科が1人、臨床福祉心理学科が20人、その他（卒業生（科目等履修生））が1人であった。

実習先種別で分けた回答数は、高齢者福祉が36人、障害者福祉が19人、児童福祉が22人、医療福祉（病院、診療所）が1人、地域福祉（社会福祉協議会、地域包括支援センター）が18人であった。

ソーシャルワーク実習を行う以前に修了した実習の有無については、46人が修了済みで50人が未修了と回答した。修了済みの実習内容の内訳（複数回答）は、介護実習が30人、保育実習が1人、ホームヘルパー2級が19人、その他が3人であった。

#### 4. 2. 2. 職員・教員からの教育・指導

実習先の職員からの教育・指導への回答について、「丁寧な教育・指導を受けた」

表1 回答者の所属学科・コースおよび実習先種別

実習先種別		高齢者福祉	障害者福祉	児童福祉	医療福祉(病院等)	地域福祉(社協等)	学科・コース別合計
生活医療福祉学科	生活医療福祉コース	4	2	1	1	1	9
	介護福祉コース	11	6	3	0	5	25
	児童福祉コース	0	4	12	0	0	16
福祉健康スポーツ学科		13	4	2	0	5	24
経営福祉ビジネス学科		1	0	0	0	0	1
臨床福祉心理学科		6	3	4	0	7	20
その他(卒業生(科目等履修生))		1	0	0	0	0	1
実習先種別合計		36	19	22	1	18	96

(注) セルの数値は、人数を表す。

が62人、「まあ丁寧な教育・指導を受けた」が30人、「あまり丁寧な教育・指導を受けなかった」が3人、「丁寧な教育・指導を受けなかった」が0人、無回答が1人であった。

この結果から、「丁寧な教育・指導を受けた」と「まあ丁寧な教育・指導を受けた」を合計すると92人であり、実習先職員からの教育・指導が丁寧でなかったと考えている者が非常に少数であることがわかる。

次に、実習中における神福大教員からの教育・指導（巡回指導、帰校日指導、電話指導など）への回答について、「丁寧な教育・指導を受けた」が73人、「まあ丁寧な教育・指導を受けた」が20人、「あまり丁寧な教育・指導を受けなかった」が1人、「丁寧な教育・指導を受けなかった」が2人であった。

この結果から、「丁寧な教育・指導を受けた」と「まあ丁寧な教育・指導を受けた」を合計すると93人であり、実習中における神福大教員からの教育・指導が丁寧でなかったと考えている者が非常に少数であることがわかる。

以上を踏まえると、実習生はおおむね実習先の職員および神福大の教員から丁寧な指導を受けたと考えているといえる。ただし、若干名とはいえ、丁寧な教育・指導を受けなかったと感じている実習生がいるこ

とも事実であり、教員はこのことを看過してはいけない。

#### 4. 2. 3. 主観的な困りごと

本調査の回答人数である96人のうちの75人が、困りごとの項目（利用者との関係、職員との関係、利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）、実習のプログラム内容、実習記録、個人情報（ケース記録など）の閲覧、自身の体調）のいずれか1つ以上に「困りごとがあった」もしくは「まあ困りごとがあった」と回答している。

表2は、困りごとの各項目とその困りごとの有無の集計結果をクロス表としてまとめたものである。そして図1は、その割合を帯グラフにしたものである。

「利用者との関係」について、「困りごとがあった」と「まあ困りごとがあった」の合計は48人（50%）、「あまり困りごとはなかった」と「困りごとはなかった」の合計は48人（50%）であった。

以下同様に、「職員との関係」について、前者の合計は22人（22.9%）、後者の合計は74人（77.1%）であった。

「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」について、前者の合計は34人（35.4%）、後者の合計は62人（64.6%）であった。

表2 困りごとの各項目と困りごとの有無のクロス表

(n=96)

学科・コース	困りごとの有無	困りごとがあった	まあ困りごとがあった	あまり困りごとはなかった	困りごとはなかった
利用者との関係		23(24.0)	25(26.0)	31(32.3)	17(17.7)
職員との関係		7(7.3)	15(15.6)	34(35.4)	40(41.7)
利用者への支援技術(相談援助技術や介護技術など)		7(7.3)	27(28.1)	46(47.9)	16(16.7)
実習のプログラム内容		3(3.1)	10(10.4)	43(44.8)	40(41.7)
実習記録		12(12.5)	16(16.7)	43(44.8)	25(26.0)
個人情報(ケース記録など)の閲覧		5(5.3)	8(8.3)	32(33.3)	51(53.1)
自身の体調		13(13.5)	15(15.6)	25(26.0)	43(44.8)

(注) セルの数値は、人数およびパーセント（小カッコ内）を表す。



(n=96)

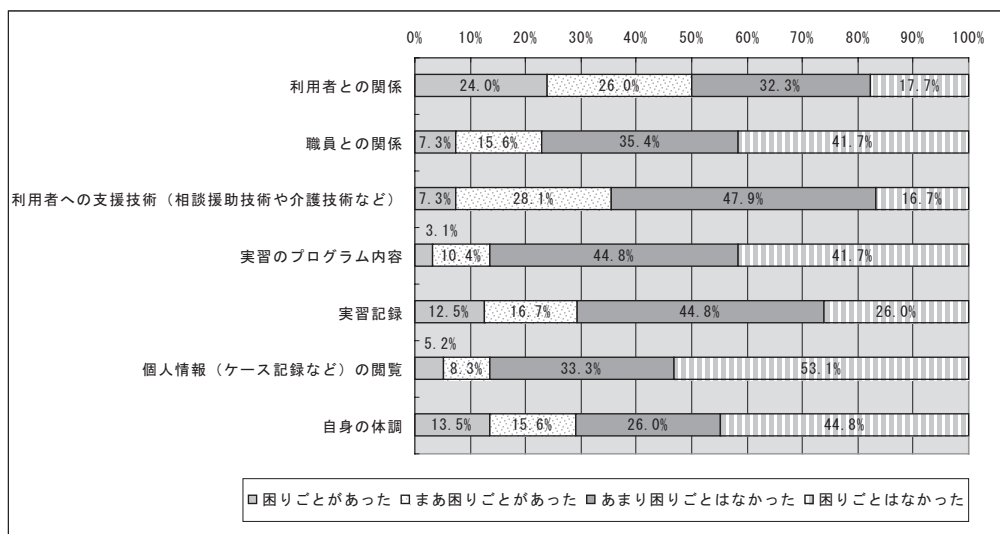


図1 困りごとの各項目と困りごとの有無の割合

「実習のプログラム内容」について、前者の合計は13人（13.5%）、後者の合計は83人（86.5%）であった。

「実習記録」について、前者の合計は28人（29.2%）、後者の合計は68人（70.8%）であった。

「個人情報（ケース記録など）の閲覧」について、前者の合計は13人（13.5%）、後者の合計は83人（86.5%）であった。

「自身の体調」について、前者の合計は28人（29.2%）、後者の合計は68人（70.8%）であった。

以上の結果から、「困りごとがあった」と「まあ困りごとがあった」の合計割合が多い項目を順番に並べると、①「利用者との関係」（50%）、②「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」（35.4%）、③「実習記録」「自身の体調」（ともに29.2%）であることがわかる。

なお、参考として、実習先種別における困りごとの各項目とその困りごとの有無の集計結果を本稿の最後に掲載しておく（資

料2）。

#### 4. 3. 基本属性と困りごと項目の関係

ここでは回答者の基本属性のうち、「性別」「ソーシャルワーク実習を行う以前に修了した実習の有無」と「困りごとの有無」の回答人数の偏りについて、有意水準5%でPearsonの $\chi^2$ 検定（ただし、期待度数が5以下のセルがある場合は、Fisherの直接確率計算法による両側検定）を行った結果を示す。

なお、「学年」「所属・コース別」「実習先種別」と「困りごとの有無」については、回答数が著しく少ない項目があったため、この検定を行わなかった。

また、「困りごとの有無」については、回答数が多いとはいえないため、「困りごとがあった」「まあ困りごとがあった」を「困りごとあり」、「あまり困りごとにはなかった」「困りごとにはなかった」を「困りごとなし」とそれぞれ統合してこの検定を行うこととした。

表3は、「性別」と「困りごとの有無」の

表3 性別と困りごとの有無のクロス集計表

困りごとの項目	困りごとの有無	男性 (n=41)	女性 (n=55)
利用者との関係について	あり	18	30
	なし	23	25
職員との関係について	あり	7	15
	なし	34	40
利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）について	あり	17	17
	なし	24	38
実習のプログラム内容について	あり	8	5
	なし	33	50
実習記録について	あり	13	15
	なし	28	40
個人情報（ケース記録など）の閲覧について	あり	4	9
	なし	37	46
自身の体調について	あり	14	14
	なし	27	41

(注) セルの数値は、人数を表す。

2×2表をまとめたものである。この表について前述の検定を行った結果、人数の偏りに有意な差がみられる項目はなかった。

次に、「ソーシャルワーク実習を行う以前に修了した実習の有無」と「困りごとの有無」

の2×2表(表4)について、同様の検定を行った。その結果、次の1項目について人数の偏りに有意な差がみられた。それは、「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」( $\chi^2(1)=5.11, p<.05$ )であった。こ

表4 修了実習の有無と困りごとの有無のクロス集計表

困りごとの項目	困りごとの有無	修了実習あり (n=46)	修了実習なし (n=50)
利用者との関係について	あり	22	26
	なし	24	24
職員との関係について	あり	8	14
	なし	38	36
利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）について	あり	11(-2.3*)	23(2.3*)
	なし	35(2.3*)	27(-2.3*)
実習のプログラム内容について	あり	5	8
	なし	41	42
実習記録について	あり	12	16
	なし	34	34
個人情報（ケース記録など）の閲覧について	あり	6	7
	なし	40	43
自身の体調について	あり	11	17
	なし	35	33

\* →  $p<.05$

(注) セルの数値は、人数と調整済み残差（小カッコ内）を表す。

の項目の調整済み残差は、表4のとおりである。この結果から「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」について、修了した実習がある学生よりも修了した実習がない学生が困りごとを抱きやすい傾向があることが示唆された。

なお、参考として、修了した実習があると回答した学生（46人）について、修了実習別（複数回答）に分けた「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」の「困りごとの有無」の回答数を示しておく。この項目について、介護実習修了者（30人）の回答人数は「困りごとがあった」が8人、「困りごとがなかった」が22人、保育実習修了者（1人）は「困りごとがあった」が0人、「困りごとがなかった」が1人、ホームヘルパー2級実習修了者（19人）は「困りごとがあった」が3人、「困りごとがなかった」が16人、その他の実習修了者（3人）は「困りごとがあった」が1人、「困りごとがなかった」が2人であった。

#### 4. 4. 質的データの分析

ここでは前述の困りごとの各項目における具体的内容の自由記述について、定性的コーディングを行った分析結果を記す。このコーディング作業については、前述のようにソーシャルワーク実習に携わる3人の教員で行った。なお、このコーディングについては、読者が困りごとの具体的内容をとらえやすくするために、抽象度をあまり高めないように心掛けた。

表5は、この作業を行った結果、困りごとの項目別に生成した主観的困りごとの概念的カテゴリー一覧である。

表5から神福大生はソーシャルワーク実習中において、さまざまな主観的困りごとを抱いていることがわかる。

## 5. 考察

本調査結果から、平成24年度にソーシャルワーク実習を行った神福大実習生の多くは、実習に何らかの主観的困りごとをもち、そしてこの主観的困りごとは多種多様であることがわかった。

ここでは、神福大教員が実習生に行うべきソーシャルワーク実習中におけるスーパービジョンの内容について、本調査の主観的困りごとに係る分析結果とスーパービジョンの理論を活用して考察を行うこととする。

### 5. 1. 統計結果の考察

本調査の統計結果として、神福大のソーシャルワーク実習生が抱く主観的困りごととしては、「利用者との関係」「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」が上位2項目であった。このことから年度や実習先種別によって違いはあると思われるが、神福大教員はソーシャルワーク実習生が利用者とのかかわりに関して主観的困りごとを抱いているかもしれないという意識をよりもって、スーパービジョンを行うことに留意すべきあるといえよう。

なお、福祉関連の実習中における学生の主観的困りごとの統計資料があまり見受けられないなかで、ソーシャルワーク実習ではないが保育士養成課程における施設実習（児童養護施設などの福祉関連施設で実施）の統計結果がある。この結果においても本調査結果と同様に、利用者との関係が困りごととして一番多くなっている<sup>15)</sup>。

以上のこととあわせて、本調査の分析結果から神福大教員は修了した実習がある学生と比べ、修了した実習がない学生がより専門的な知識や技能が必要と思われる「利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）」



表5 主観的困りごとと概念的カテゴリー一覧

困りごとの項目	主観的困りごとと概念的カテゴリー
利用者との関係について	コミュニケーション、良好な関係の構築、拒否的態度、かかわる機会の少なさ、専門知識・技術（認知症、レクリエーション、相談・助言・促しの方法など）の不足、セクハラ、利用者からの暴言・暴力・悪口、施設のルールに従わない利用者への対応、利用者同士のけんかへの対応、住所を聞かれた場合の対応、贈り物への対応、利用者から介助を依頼されたが実習生の立場上できないこと
職員との関係について	質問のしづらさ・声のかけづらさ、指導・指示の不十分さ、評価されず悪くいわれること、情報が得られないこと、日誌が返ってこないこと、関係者に対する愚痴・悪口を聞かされること
利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）について	意思疎通に障害がある利用者などとの適切なコミュニケーションの回り方、信頼関係構築の方法、相談援助における利用者への質問方法、相談援助をあまり学べないこと、個別援助計画の作成・実施、ケアワークの機会がないこと、実習生が実施してもよいケアワークの判断、レクリエーション、支援方法（自立支援、利用者に合った支援、指導・助言など）、利用者から同じことを何度も聞かれることへの対応方法、不穏状態の利用者への対応方法、利用者のけがへの対応方法
実習のプログラム内容について	実習期間・内容が当初の予定と違うこと、実習内容の予定がわからないこと、1日ごとに目標や課題が変わること、期間が短いため利用者把握できないこと、タイトなタイムスケジュール、夜勤の翌日に日勤が入ること、ケアワーク中心の実習、利用者の見守りが多いこと、長時間することがないこと、社会福祉士からの指導が少ないこと
実習記録について	日誌の書き方（目標・考察・課題など）がわからないこと、日誌（目標・分析・考察など）を上手に書けないこと（内容にまとまりがない、話し言葉になる、感想文になる）、日誌を書くことに労力がかかること（時間がかかる、毎日書く、細かく書くなど）、日誌に書くことがなくなること、実習指導者から日誌の返却が遅いこと、実習指導者によって日誌の書き方の指導内容が違うこと、実習指導者から日誌の内容に関する指導がないこと、実習指導者のコメント欄がせまく指導者に気を使わせること
個人情報（ケース記録など）の閲覧について	利用者の情報（個別支援計画の作成に必要な情報など）が十分に得られないこと（ケース記録が見られない、職員から情報を得づらい、利用者からあまり情報が得られない）、ケース記録に書かれている専門用語が理解できないこと、個人情報を保護すること
自身の体調について	心身の疲労・不良（ストレス、実習序盤の環境変化への不適応、通学時間の長さ、日誌作成の労力、水分補給が不十分、考え過ぎなど）、体調不良による欠席・実習延長・職員への迷惑、睡眠不足・眠気、ギプスをしての実習
その他	他の実習生関連（気が合わない）、宿泊実習関連（オン・オフの切り替えが難しい）、一般常識関連（お礼状の書き方など）、実習生の役割関連（実習生としての役割がわからない）

(注)「その他」の概念的カテゴリーについては、「利用者との関係について」～「自身の体調について」と重複する内容を削除している。

について、主観的困りごとを抱く傾向があることを念頭に置いてスーパービジョンを行うことも留意点であるといえる。

## 5. 2. 質的データの分析結果の考察

ここでは、本調査における質的データの分析結果とスーパービジョンの機能を照らし合

わせて考察を行う。

スーパービジョンの機能には、前述のように支持的機能、教育的機能、管理的機能がある。本調査結果である概念的カテゴリーを活用して、教員が留意すべき主観的困りごとをスーパービジョンの機能別で仮説的にとらえたものを以下に記す。

まずスーパービジョンの大前提として、実習生が実習現場において主観的困りごとを抱えた場合、教員は支持的機能を発揮して実習生に寄り添い支えていくことが求められるといえる。

次に教育的機能として、教員は利用者とのかかわり方や支援方法、職員とのかかわり方、利用者の情報収集方法、個人情報保護の徹底、個別支援計画の作成方法、実習記録の書き方、専門知識・用語に関する教育を必要な実習生に行うことが求められるといえる。

そして管理的機能として、教員は各種ハラスメントへの対応、実習プログラムの妥当性の検証（夜勤明けの日勤などの無理な実習形態になっていないか、食事・水分補給の時間が確保されているか、職員からの日誌返却が遅くないか、ケアワークのみの実習になっていないかなど）、体調の確認を実習生に行うことが求められるといえる。

以上のようなスーパービジョンを行う際に、教員は次のことにも気をつけるべきであると考えられる。それは、教員が実習生の主観的困りごとの原因・背景を分析した後に、適切なスーパービジョンを行うことである。この具体例としては、質的データの分析結果である「職員との関係」項目の「指導・指示の不十分さ」や「実習のプログラム内容」項目の「長時間することがないこと」について、実習生としての基本的態度や気づきの能力、主体性・積極性などをアセスメントして、必要であれば実習生に教育的なスーパービジョンを行うことである。

加えて、教員がスーパービジョンとして行うべきことについては、本調査から浮かび上がった内容以外のもの（実習計画書の実施状況の確認や実習目標の意識化など<sup>16)</sup>）もある。このことから実習生が主観的困りごとを感じていない事柄についても、教員からみてスー

パービジョンが必要であると判断する場合には、積極的にスーパービジョンを行うべきであるといえる。

ただし、実習生についてもスーパービジョンに対して受動的にならずに、必要があれば自分から教員に連絡をとり相談をすることや、巡回指導の日を早めに設定してもらうように訴えることが求められよう<sup>17)</sup>。

### 5. 3. その他の留意点

考察の最後として、本調査の結果には現れていないが、教員がスーパービジョンを行う際に留意すべきことと考えられるものを3つ挙げる。

留意点の第1として、スーパービジョンが充実するためにはスーパーバイザーとスーパーバイジーの関係が重要であるため<sup>18)</sup>、教員は実習生と信頼関係を築くことに努めることである。

第2として、スーパービジョンは教員と実習生の二者関係のみならず、状況に応じて実習先の指導者も交えて三者で行うことが効果的である<sup>19)</sup> ため、教員は実習指導者と連携を図ることも念頭に置くことである。

第3として、教員はこのような三者（教員、実習生、実習指導者）のつながりといった横断的なとらえ方のみならず、実習生とのかかわりを縦断的にとらえることも必要なことである。具体的には、実習の事前指導において学生が実習中に主観的困りごとをできるだけ抱かないための教育を行い、そして事後指導で学生が抱いた主観的困りごとへのフォローをして教育効果を高めることである。

## 6. 今後の課題

最後に、今後の研究課題と本研究の留意点を示す。研究課題の1点目は本研究結果の妥

当性の検証などの本研究テーマに係るより信頼性の高い知見を得るために、次年度以降も継続的に調査を行うことである。この主たる理由は、本調査の対象者数および回答数が多いとはいえないからである。

2点目は、実習先種別に対応するスーパービジョンの留意点に関する知見を加えることである。なぜなら、本研究では回答数が著しく少ない実習先種別があったため、実習先種別に対応した統計的な分析を行わなかったが、資料2から実習先種別によって主観的困りごとの傾向が違う可能性があることがうかがえるからである。

本研究の留意点は本調査対象が神福大の学生のみであったため、本研究結果を他大学・専門学校のスーパービジョンに、そのまま活用するには注意を要することである。

#### 【謝辞】

本調査に回答してくださった神福大の学生に心より感謝を申し上げます。

#### 文献

- 1) 小川智子, 矢野明宏: 社会福祉援助技術現場実習におけるスーパービジョンに関する研究—実習巡回教員の役割を通して. 城西国際大学紀要, 15 (3), 83-96, 2007
- 2) 河野貴代美, 神波幸子: 社会福祉実習について (パート3) —実習における学生のストレスからみた一考察. 帝京平成大学紀要, 13 (2), 27-33, 2001
- 3) 新村出編: 広辞苑 第6版. 岩波書店, 2008
- 4) 高梨未紀: スーパービジョンの展開. 加藤幸雄, 小椋喜一郎, 柿本誠, 笛木俊一, 牧洋子編, 相談援助実習—ソーシャルワークを学ぶ人のための実習テキスト,

122-126, 中央法規出版, 2010

- 5) 村田真弓, 久貝興徳, 高木博史: 沖縄大学における社会福祉実習教育の現状と課題—2007年度実習生アンケート調査より. 地域研究, 5, 73-94, 2007
- 6) 小倉毅, 土谷由美子: 保育士養成課程における施設実習に関する課題—アンケート調査からの一考察. 中国学園紀要, 8, 77-88, 2009
- 7) 植田寿之: スーパービジョンとコンサルテーションの技術. 社会福祉士養成講座編集委員会編, 新・社会福祉士養成講座8 相談援助の理論と方法Ⅱ第2版, 183-204, 中央法規出版, 2010
- 8) 7) に同じ。
- 9) 7) に同じ。
- 10) 後山恵理子: スーパービジョンの理解. 岩田正美, 大橋謙策, 白澤政和監, MINERVA 社会福祉士養成テキストブック⑦ 相談援助実習, 160-167, ミネルヴァ書房, 2009
- 11) 10) に同じ。
- 12) 米本秀仁: 実習スーパービジョンと巡回・帰校日指導. 米本秀仁, 久能由弥編, 現代の社会福祉士養成シリーズ 相談援助実習・実習指導, 268-283, 久美, 2011
- 13) 10) に同じ。
- 14) 佐藤郁哉: 質的データ分析法—原理・方法・実践. 新曜社, 2008
- 15) 6) に同じ。
- 16) 1) に同じ。
- 17) 4) に同じ。
- 18) 10) に同じ。
- 19) 井上浩: 実習教育の枠組みに関する一考察. 関西福祉大学研究紀要, 9, 79-87, 2006

(資料1 アンケート用紙)

## ソーシャルワーク実習における困りごとに関するアンケート

以下の質問 1～11 について、あなたの自身のことや考えをお答えください。

**1. 本アンケート用紙の記入月日をご記入ください。**

\_\_\_\_月 \_\_\_\_日に記入

**2. 所属学科(コース)として、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①生活医療福祉学科(生活医療福祉コース) ②生活医療福祉学科(介護福祉コース)  
③生活医療福祉学科(児童福祉コース) ④福祉健康スポーツ学科 ⑤経営福祉ビジネス学科  
⑥臨床福祉心理学科 ⑦その他( )

**3. 学年として、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①3年生 ②4年生 ③その他( )

**4. 性別として、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①男性 ②女性

**5. 実習先の分野として、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①高齢者福祉 ②障害者福祉 ③児童福祉 ④医療福祉(病院、診療所)  
⑤福祉行政(福祉事務所、児童相談所など) ⑥地域福祉(社会福祉協議会、地域包括支援センター)  
⑦その他( )

**6. 実習中断について、該当するもの1つに○を付けてください。**

あわせて、「②実習を中断した」と回答した人は、中断の理由を自由回答欄にご記入ください。

- ①実習を中断しなかった(実習を180時間行った) ②実習を中断した(実習を180時間行わなかった)

**【中断理由の自由回答欄】(「②実習を中断した」に○を付けた人は記述してください)**

**7. 今までに修了した実習の有無について、該当するもの1つに○を付けてください。**

あわせて、「①修了した実習がある」と回答した人は、修了した実習内容として該当するものすべてに○を付けてください。

- ①修了した実習がある  
⇒修了した実習内容：①介護実習 ②保育実習 ③ホームヘルパー2級実習  
④その他( )  
②修了した実習がない

**8. 実習先の職員からの教育・指導について、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①丁寧な教育・指導を受けた    ②まあ丁寧な教育・指導を受けた  
③あまり丁寧な教育・指導を受けなかった    ④丁寧な教育・指導を受けなかった

**9. 実習中における本学教員からの教育・指導（巡回指導、帰校日指導、電話指導など）について、該当するもの1つに○を付けてください。**

- ①丁寧な教育・指導を受けた    ②まあ丁寧な教育・指導を受けた  
③あまり丁寧な教育・指導を受けなかった    ④丁寧な教育・指導を受けなかった

**10. 実習中における「困りごと」の有無に関する次の質問（1）～（7）について、該当するもの1つに○を付けてください。**

あわせて、困りごとがあったと回答した人（「①困りごとがあった」「②まあ困りごとがあった」と回答した人）は、その困りごとの具体的内容を記述してください。

**（1）利用者との関係について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

**（2）職員との関係について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

**（3）利用者への支援技術（相談援助技術や介護技術など）について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**



**(4) 実習のプログラム内容について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

**(5) 実習記録について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

**(6) 個人情報（ケース記録など）の閲覧について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

**(7) 自身の体調について**

- ①困りごとがあった    ②まあ困りごとがあった  
③あまり困りごとはなかった    ④困りごとはなかった

**【困りごとの具体的内容の記述欄】（①②に○を付けた人は記述してください）**

11. 以上の（1）～（7）のほかにも、実習中に困りごとがあった場合は、下欄に自由に記述してください。  
【その他の困りごとの記述欄】

これでアンケートは終わりです。ご協力、ありがとうございました。  
ご記入もれがないか、もう一度ご確認ください。

資料2 実習先種別における困りごとの各項目とその困りごとの有無の割合

困りごとの項目	実習先種別	困りごとがあった	まあ困りごとがあった	あまり困りごととはなかった	困りごとはなかった
利用者との関係	高齢者福祉 (n=36)	25.0	22.2	30.6	22.2
	障害者福祉 (n=19)	31.6	36.8	26.3	5.3
	児童福祉 (n=22)	31.8	31.8	22.7	13.6
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	0.0	100.0	0.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	5.6	11.1	55.6	27.8
職員との関係	高齢者福祉 (n=36)	5.6	2.8	44.4	47.2
	障害者福祉 (n=19)	10.5	15.8	26.3	47.4
	児童福祉 (n=22)	9.1	40.9	18.2	31.8
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	100.0	0.0	0.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	0.0	11.1	50.0	38.9
利用者への支援技術(相談援助技術や介護技術など)	高齢者福祉 (n=36)	8.3	19.4	52.8	19.4
	障害者福祉 (n=19)	10.5	36.8	36.8	15.8
	児童福祉 (n=22)	9.1	36.4	50.0	4.5
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	0.0	0.0	0.0	100.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	0.0	27.8	50.0	22.2
実習のプログラム内容	高齢者福祉 (n=36)	2.8	13.9	41.7	41.7
	障害者福祉 (n=19)	0.0	5.3	52.6	42.1
	児童福祉 (n=22)	4.5	13.6	36.4	45.5
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	0.0	100.0	0.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	5.6	0.0	55.6	38.9
実習記録	高齢者福祉 (n=36)	16.7	13.9	41.7	27.8
	障害者福祉 (n=19)	10.5	10.5	47.4	31.6
	児童福祉 (n=22)	4.5	31.8	40.9	22.7
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	100.0	0.0	0.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	11.1	11.1	55.6	22.2
個人情報(ケース記録など)の閲覧	高齢者福祉 (n=36)	0.0	8.3	25.0	66.7
	障害者福祉 (n=19)	10.5	0.0	36.8	52.6
	児童福祉 (n=22)	13.6	22.7	27.3	36.4
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	0.0	0.0	100.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	0.0	0.0	50.0	50.0
自身の体調	高齢者福祉 (n=36)	22.2	16.7	25.0	36.1
	障害者福祉 (n=19)	15.8	10.5	21.1	52.6
	児童福祉 (n=22)	4.5	27.3	22.7	45.5
	医療福祉(病院、診療所) (n=1)	0.0	100.0	0.0	0.0
	地域福祉(社協、地域包括) (n=18)	5.6	0.0	38.9	55.6

(注) セルの数値は、パーセントを表す。